

# 伊勢を創った太田小三郎 青春記

現代御師再考塾 太田小三郎研究室

秋田耕司

はじめに

御幸道路倉田山の太田小三郎君紀功碑が建立されている広場があるけれど、令和元年（二〇一九年）九月に神宮司庁により、玉砂利が敷き詰められ、清浄な雰囲気を整備されたことは小三郎ファンにとつて誠に喜ばしい限りである。その碑の説明文などに解説されているように、伊勢では、太田小三郎は九州生まれで、明治五年（一八七二年）、二十七歳の時、古市の三大妓楼の一つ、備前屋の主人となつてから彼を中心として、明治十九年（一八八六年）「神苑会」を結成し、日本の総鎮守として伊勢神宮を、その門前町として宇治山田（現、伊勢市）明治二十二年に宇治と山田が合併して町となつた。）をそれにふさわしい「神都」として整備したことは、



伊勢市民に語り継がれているところではあるけれども、簡単にその実績を再確認する。

宇治橋内など両宮のそばにあつた民家・商家・御師邸を撤去して、現在のように、祈りの場としてふさわしい静寂で清々しい神苑を整備したことを初め、二見に要人の迎賓館として賓日館を、また、倉田山に、遷宮毎に作り直される宝物を展示する徴古館や農業技術の伝承を図つた農業館ほか、天皇からの御物を展示する神宮撤下御物拝観所、古来からの書籍を集めた神宮文庫などを建設し配置した。

さらに、それらと全国とを有機的に結合するため、参宮鉄道（株）設立（明治二十二年）による鉄道（現、JR参宮線）の開通や、宮川電気（株）（明治二十九年創立）による路面電車（三重交通神都線）昭和三十六年（一九六一年）廃線）の運行を行い、御幸道路を整備して、全国からの参詣のため交通の便も図つた。さらに、宮川電気（株）は発電

事業（現、中部電力）や都市ガスの供給（現、東邦ガス）も行い、山田銀行（株）の設立（明治二十七年）などの金融事業も行つて、産業の基盤である経済的インフラをも総合的に整備して、小三郎は正に、「（近代）伊勢を創つた太田小三郎」と呼ぶことが相応しい。

しかし、九州生まれの小三郎がなぜ、伊勢に定住してこのようなことをなしたのか、について語る資料はなかなか見つからない。そこで、限りある資料を突き合わせ、小三郎が九州で誕生してから古市妓楼「備前屋」の主人になるまでの青春期を考察してみるが、史料が殆どないため、史実を背景に、大いなる想像によつて執筆したものであり、フィクションとして読んでいただければ幸いです。

小三郎誕生と背景

小三郎は備前屋の主人になる前は鷹羽匡一(以下、「匡一」と言った。幕末期の弘化二年(一八四五年)、豊前国田川郡彦山村英彦山ひさひのの「靈仙寺」にて、鷹羽寿一郎の三男として誕生した。鷹羽家は代々、座主家執当という寺の重職にあった。座主とは住職の最上位の別称である)のでその世話役と言ったところである。

豊前国は現在の福岡県南部から大分県北部にまたがってあった国で、英彦山はそれらの県境に位置していて、現在の小倉市に城を構える小倉藩が所管していたけれど、靈仙寺は日本三ヶ天修験の霊場として神仏が習合した別格本山とされ、小倉藩からは緩やかな自治が認められていた。

靈仙寺を所管する小倉藩は、初代藩主小笠原忠真ただの母が家康の孫にあたり、西国譜代大名の筆頭として幕臣中の幕臣であり、幕府を補佐しなければならないと

いう強い考えをもった佐幕(幕府を補佐する意)思想が強かった。しかも関門海峡に面した海路交通の要衝、門司を守護する大きな役目を担っていた。対岸には尊王攘夷派の長州藩の下関がある。

反面、「靈仙寺」の始祖は皇族の出であり、もともと尊王・尊皇・勤皇・勤王ともいうがここでは「尊王」に統一する。(思想が強かったが、幕末には座主(のちの高千穂教有きょうゆう)の母が関白一条忠良ただよしの息女で三條実美みづみとみの祖父公修きんおきの養女、つまり、実美の叔母で当たる)ことなどもあり、公卿との結びつきも、そして尊王思想も一層、強固になつていたのは容易に推測できる。

### 三條実美

なぜ、ここで三條実美が紹介されるのかについては、のちほどご理解いただけると思いますが、幕末の出来事を

まとめ上げ、明治維新を成し遂げて、明治政府の礎を主導したのは明治政府最初の宰相として太政大臣となつた三條実美(以下、実美という。)の功績が大きかつたからだったと考えられます。彼が誕生する頃の背景を説明します。

実美が誕生する天保年間(天保元〜二五年 一八三〇〜四四年)は、国内では大飢饉が発生(天保四〜十年)し、困窮した民衆に同情して大塩平八郎の乱(天保八年)などが勃発するような有様であり、中国「清」ではイギリスとアヘン戦争(天保十一〜二年)を行つて大敗し、不平等条約が締結されて、国が滅びるような衰退を招いている。そんな内憂外患の有様で、民衆や国内各藩の不安が幕府への不信感として高まつていた。一方、朝廷でも長年、膠着した摂関政治(一部の家柄しか政治を司る摂政や関白になれない)制度への不満が高まつていた。そのような中、天保九年(一八三八年)には浄瑠璃「伊勢音頭恋寝

刃が大阪で上演されたり、伊勢では古市が最盛期を迎えているが、「麻吉」が火災で焼失するなどもあつた時代である。

そのような背景の中、天保八年(一八三七年)、実美は、父、贈右大臣 実万みちまね、母、土佐藩主 山内豊策の娘 紀子の四男として生まれた。匡一より八歳年上である。三條家は元々、坂本龍馬がいた土佐藩 山内家と縁戚の関係にあつて、また、毛利家やその領国である周防・長門とも因縁があり、のちの行動の基礎となつている。同年生まれでは、十五代將軍となつた徳川慶喜や土佐藩士の板垣退助などがいる。三條家の家格は摂関家に次ぐ清華九家の一家で、公家の中でも最上層に位するが、左・右大臣の下の内大臣止まりという身分であつた。この年には、日本の攘夷派がアメリカの商船モリソン号を砲撃した事件(モリソン号事件)が勃発した年であり、攘夷思想が高まつていた時期である。

その後、匡一が誕生した弘化年間(弘化元々五年一八四四〜八年)になるけれど、アメリカやフランス・イギリスなどが通商を求める外力が高まつてきた時代となつてきている中で、続く嘉永二年(一八四九年)は孝明天皇の御代となり、同年、伊勢神宮では第五十四回式年遷宮が行われている。

嘉永六年(一八五三年)、ペリー総督が率いる米国艦隊が浦賀に来航(黒船来航)して開国を要求する事があつた。「泰平の眠りを覚ます上喜撰(上等なお茶のこと)であるが、蒸気船を意味している)、たつた四杯で夜も寝られず。」という狂歌が知られているけれど、これ以降、明治維新までを「幕末」と呼ぶ。

幕府は米国艦隊来襲に備え、山田奉行に神宮の守備を命じている。この時、伊勢の古市では大火が発生し、盛況であつた古市にも陰りが見え始めていた。

嘉永七年・安政元年(一八五四年)、実美の兄、公睦が山の南側に位置する豊後国日田で開塾していた「咸宜園かんきんえん」で広瀬青村に師事して学んでいた。「咸宜園」は青村の養父、広瀬淡窓が開いた日本最大級の私塾であつた。同塾は身分に関わらず入塾でき、江戸時代から明治まで存続したが、そこで学んだ者は、蘭学者 高野長英や戊辰戦争参謀の大村益次郎や長三州、日本初の写真家 上野彦馬など明治を創った男たちがいた。

安政七年・万延二年(一八六〇年)、大老井伊直弼が暗殺された(桜田門外の変)。このことから江戸幕府は幕藩体制を強化する必要に迫られ、公武合体が強くと主張されるようになる。公武合体とは、元来、幕府は朝廷から政権運営を委任されていて、朝廷と幕府は一体であるとの思想で、朝廷と幕府の繋がりを強化して、幕藩体制の延命を図つたものであるが、これまでの幕府の攘夷という考えは、侵略を恐れて諸外国を追い払うというものだつたが、彼らの強さを認識するにつれて、公武合

死去して、元服したばかりの実美が三茶家を継承した。十七歳だつた。京都御所が炎上したり、日米和親条約が締結されたり、安政地震が発生した津波で大きな被害を被つた時代だつた。

安政三年には米国総領事リスが下田に着任し、同五年(一八五八年)には彦根藩主井伊直弼が大老となり、勅許を得ないまま、米国と、続いて蘭・露・英・仏と修好通商条約を締結したことで朝廷との関係が悪化した。それを批判する勢力や幕府を指弾する尊王派の排除・弾圧を行った。いわゆる「安政の大獄」である。安政六年(一八五九年)には収束したが、実美の父三茶実萬や吉田松陰が断罪されている。

匡一の幼年期

安政五年(一八五八年)、匡一は十三歳を迎え、英彦

体により国内の体制を強化して外国との通商を盛んして国力を高め、列強に対抗するという考えに変容してきている。この年に、幕府は勝海舟を艦長とし、通訳ジョン万次郎らを乗船させて、咸臨丸で初の太平洋横断を果たして渡米している。

万延二年・文久元年(一八六一)年には、ロシアが対馬を半年間に亘り占領した事件(サドニツク号事件)が勃発するなど外国の脅威が迫ってきている。

翌、文久二年(一八六二年)一月十五日(以下、日付は旧暦で表記)、公武合体を推進した老中安藤信正に反対した佐幕派の水戸藩士が同年、安藤を襲撃した(坂下門外の変)状況の中で公卿の岩倉具視が公武合体を具現化し、二月十一日、孝明天皇の妹 和宮親子(ちか)内親王が將軍家茂に降嫁した。

一方で、長州藩は通商条約破棄し、外国と「戦も辞さず(破約攘夷論)」という強行的な考えを持つている一

方で、薩摩藩島津久光は尊王の考えはありながら政治は幕府が行うというのが考えであつて、国論は三分されていた。それによつて、四月二十三日、倒幕を計画していた薩摩藩士らを久光自らが上意討ちした(寺田屋事件)が、また、八月二十一日、久光の行列を遮つた英国人を殺傷した事件(生麦事件)が起きた最中にも幕府は貿易の拠点を作るために「諸藩上海使節団」を送つている。その中には長州藩の高杉晋作もいたけれど、中国とイギリスと間で勃発したアヘン戦争(一八四〇〜二一年)二十年前の出来事)後の清国の有様をみて、国内にも一層の尊王攘夷論が高まつていった。

同時期に、伊勢的矢湾にイギリス商船が入津するこゝとがあり、鳥羽藩は伊雑宮の防衛を命ぜられるような不穏な状況が迫つていた。

この機運の中、安政の大獄で断罪された攘夷派三条実萬の子として実美(二十五歳)は評価され、登場する。

うになり、幕府に攘夷実行を迫つた。実美は、縁戚関係にあつた土佐藩と地縁があつた長州をまとめ、薩摩藩に圧力をかけているが、薩摩藩との亀裂が深まつた。五月十日、長州藩が単独で馬関海峡(現、関門海峡)を航行する米商船を砲撃(下関事件)し、それ以後、仏蘭外国艦隊に砲撃するも大敗し、占領を許した。この結果、長州藩は尊攘派が衰退したが、藩政の再起を願ひ、その命運を高杉晋作に託した。晋作は下関を拠点としていた長州支藩清未藩の御用商人、小倉屋の白石正二郎の支援を受け、同年六月七日、「奇兵隊」を創設している。

白石正二郎は、海上通商の要衝であつた下関竹崎浦(現、下関市)の荷受問屋「小倉屋」の大年寄である一方で、平田篤胤や本居宣長の流れをくむ国学者鈴木重胤の弟子として尊王敬神の精神に溢れていた。そのよう

実美は元々、公武合体論者であつたけれども攘夷の考えが強かつた。しかし、幕府がその意見を聞かず、なし崩しに開国したことに不満と失望があつた。そこで公武合体を非難し、岩倉具視の排斥、徳川政権打倒と王政復古の考えが醸成されてきて頭角を表し始めている。十月十二日、朝廷は幕府に通商を破約し攘夷することを督促するため、実美と姉小路公知の両名を勅使として派遣した。十二月には、実美ほか尊攘派は朝廷で体制を整えた。

実美 徳川を打倒し、お上(天皇)に政権をお任せして、何んとしても攘夷を決行せねば、我が国は立ち行かん。」

と、つぶやくのであつた。

文久三年(一八六三年)になると、攘夷論は過熱と急進化の一途をたどり、攘夷派公家が朝議を支配するよな彼を慕つて、攘夷派の長州藩士はもとより、尊攘派の公卿たちほか、薩摩藩士も小倉屋に出入りするようになる。同じく尊王の考えを持った英彦山の門徒たちとの交流も形成され、次第に長州藩との連携に発展した。また、木綿織出が多い割に藍玉製造が少ない長州藩に薩摩の藍を売り込んで薩長の交易が開始され万延二年(一八六一年)、薩摩藩御用達となつて、薩長同盟のきっかけも作つている。また、白石正二郎の末弟(三男)で、同じく下関の豪商であつた大庭家を嗣いだ景明も正二郎同様、尊王の志士として、元治元年(一八六四)十一月、高杉晋作が筑前へ亡命するに際しては同行するなどの活躍をしている。匡一は景明と下関で初対面を果たしていると思われるが、明治初年には同じく太政官に出仕したこともあり、匡一より十四歳年上であつたが、気が合つた。その後、太田小三郎となつた匡一は大庭景明の四男(明治七年生)を養嗣(光瀬(あきせ)のちの京阪電鉄社長)として迎え

ている(明治八年)こともあり、関係の深さを感じる。

実美と匡一の出会、

振り返つて、前年の生麦事件に端を發して七月二丁四日、薩摩藩はイギリスと鹿児島湾にて激突した(露英戦争)が勝敗を分ける結果ではあったものの、国力の差を痛感せざるを得なかつた。しかし、攘夷の考えが強かつた朝廷はこの薩摩藩の攘夷決行を称賛している。

この頃、長州藩は英彦山門徒との交流を深めている。八月十八日、開国派となつた薩摩藩が実美ら破約攘夷派の七公卿および長州藩を京都から追放した(八月十八日の政変)ことにより攘夷派は一時、衰退した。追放された七卿は奇兵隊の警護のもとに長州藩に到着した(七卿落ち)。また京都を追われた尊攘派は安全地を求め、英彦山にも参集している。

実美はこの時、官位を剥奪されながらも急進的な尊攘活動や提言を行つて人心を集め、若くして王政復古の時代にリーダーシップを大いに發揮している。

前述した通りであるが、三条家は英彦山座主家と縁戚の間柄であり、同じく尊王の志をもっている英彦山門徒が下関三田尻に隠棲した実美を慰問している。その時、英彦山の現状を報告し、さらに政変後の京都情勢などを探索するために英彦山門徒が派遣された。その結果として、実美ら攘夷派公卿と尊攘派の長州藩、尊王派の豪商白石・大庭らと同派の英彦山門徒との強い連合が成立した。

門徒 三条様、お目にかかれ光榮に存じます。我ら、英彦山門徒は尊王精神に溢れております。是非とも三条様のためにお役に立ちとうと存じます。」

実美 「刀強い言葉、有り難く感じ入る。」  
門徒 「こちらに控えている者は鷹羽匡一と申します。

元服を終えたばかりの若輩者ゆえ、世に知る者はおりません。各地の動静を収集するなど、三条様の用向きに何なりとお使い下さい。」

匡一 三条様、以後、お見知りおきのほど、宜しくお願い申し上げます。」

実美 「宜しく頼むぞ。」

と、実美と匡一は、初対面を果たしたのであった。

同年、長州藩と連携した英彦山門徒は攘夷に消極的な小倉藩(九州佐幕派の筆頭)を内部から突き崩す計画をしていたが、内部告発により小倉藩家老小宮民部が十一月十一日英彦山を急襲。座主をはじめ、匡一の兄・浄典を含む尊王僧十三名を捕縛し、藩内の攘夷派を一掃した(英彦山大検査)。しかし、匡一は、三条命により、

京都など各地を探索していたため難を逃れているが、いよいよ匡一の活躍が期待されるに時代がやつてきた。続いて元治元年(一八六四年)六月五日、京都三条木屋町の旅籠池田屋に潜伏していた長州・土佐藩士が新選組に襲撃され(池田屋事件)、京都で内偵していた英彦山門徒が在京の小倉藩に捕縛・処分されているが、匡一は難を逃れた。その後、七月十八日、京都を追放された長州藩勢力が会津藩主京都守護職松平容保らの排除を目指して挙兵し、京都市中において市街戦を繰り広げた(森門の変、蛤御門の変とも)。その時、英彦山の修験僧も参戦して二名が殉難している。その結果、長州藩は御所に発砲したため朝敵とされ、一回目の長州征伐が計画されている中、長州藩が攘夷として発砲した報復として英・仏・米・蘭四国連合艦隊が八月二日、長州に来襲して、圧倒的な武力の差によつて長州への上陸・占領を許した。大敗を帰した事によつて、高杉晋作ら長州藩内の

攘夷派は大いなる困難を極める。

五卿落ち

元治二年・慶応元年（一八六五年）、第一次長州征伐は長州藩三家老自刃により戦争に至らなかったが、奇兵隊には解散命令が下り、長州藩内でも佐幕派が台頭した。そのことにより長州に隠棲していた尊攘派七卿のうち、実美を含む五卿は、筑前国福岡藩（筑前藩）の管理下にある大宰府へ移動した（五卿落ち）。

現在の太宰府天満宮は当時、安楽寺天満宮といい、前別当は三条実萬と従兄弟の関係にあつたので、大宰府に落ち着いたのは一層の身の安全を願ったものであろう。大宰府で実美は長州藩を救うため薩長提携を決意している。また、この大宰府を拠点に五卿の側近で土佐藩士の中岡慎太郎は、匡一らと共に長州・薩摩・京都間を奔走し、のちの薩長同盟の締結や三条岩倉の提携に尽力

していた。坂本龍馬が主導したと言われる「薩長連合」は、実美や中岡が太宰府にて画策したものである。

その後、高杉晋作は藩内でクーデターを起して佐幕派を「掃し尊王攘夷派が藩の実権を奪取している。

伊勢ではこの年、イギリス軍艦が再び浜島港に入津したり、「ええじゃないか」が自然発生していて、不穏な状況が続いている。

英彦山義僧殉難

慶応二年（一八六六年）、匡一は二十一歳を迎えている。年初には、土佐藩士坂本龍馬、中岡慎太郎、土方久元（のちの神苑会評議員の一人）の仲介によつて、薩長同盟が成立し、薩摩藩の援助により長州藩は最新の軍備を整えられ、実美と岩倉具視も連合して、明治維新へと大きく動き出した。

幕府軍対長州藩の戦いが、六月七日より大島口から

芸州口、石州口、小倉口から開戦した（第二次長州征討・四境戦争）。そのうち小倉口の戦いを小倉戦争といつた。小倉藩は征長総督の老中小笠原長行の指揮下で小倉口の先鋒として参戦したが、これら戦闘はいずれも長州藩が圧勝したけれど、その最中の七月二十日、将軍家茂が逝去したので、これを理由に第二次長州征討は終戦となった。

しかし、小倉藩はなおも戦いを続け、小倉城に火を放つて抵抗を続け、小倉藩が捕縛し幽閉していた英彦山の座主をはじめ尊王僧十二名のうち、匡一の兄、鷹羽浄典こと、正応坊浄典（正応坊観道とも）ら六名を斬首した。この時、匡一は実美の命を受け、諸国を流浪していたが、英彦山義僧が斬首されたことを聞き、急遽、英彦山に戻り、衆徒と力を合わせ遺族の救助に尽くしている。

匡一「残された我が身ゆえ、兄上はじめ同志の遺志をしっかりと遂げねばならない。」  
と誓うのであった。

また太田小三郎となつてからも密かに、実美の協力を得ながら、義徒の遺志を継ぎ、一山の士気を回復して英彦山の興隆を図らんと諸般にわたり奔走している。

十二月五日に徳川慶喜が十五代将軍になり、二十五日には孝明天皇が崩御している。

実美の復権

慶応三年（一八六七年）、五卿は太宰府で新年を迎えた。第二次長州征伐も長州藩の勝利で終結し、この年の春、龍馬は下関の豪商伊藤助大夫の屋敷にて一ヶ月ほど新婚生活を楽しんだことが知られているが、つかの間

の平穏な時間が経過した四月十四日、高杉晋作が病死（享年二十八歳）。この頃から開国を求める諸外国を打ち払うという攘夷派の考えは、日本が開国和親して自主独立する思想に変貌してきていた。しかしながら、幕府の権威は失墜、著しくなっていた。

実美 匡「よ、もうすぐ、王政復古は実現する。さす

れば、新しい政権がなすべきことを早々に準備して置かなければならない。新しい政府がどうあるべきか、その規範（五ヶ条の御誓文）や政治体制（祭政一致など）について考えをまとめておかねばならないと考えておる。そしてそれらを臣民に理解してもらわなければならない。そのために、東京に遷都することやお上に伊勢神宮参拝をお願いすべきだと考えておるので、その手はずを整えておいて欲しい。宜しく頼むぞ。」

慶応四年・明治元年（一八六八年）、この年、明治天皇は十五歳、実美は三十二歳、匡は二十三歳だった。

勝利した官軍政権は、旧幕府の徳川家に対し、駿府七十万石の移封を下すなど厳しい処分を行ったため旧幕臣の反感を買い、同年一月三〜六日に起きた「鳥羽伏見の戦い」を発端として、明治新政府を樹立した薩摩藩・長州藩・土佐藩らを中核とした新政府軍と旧幕府軍・奥羽越列藩同盟との戦いが激化し、「戊辰戦争」が始まり、五月十五日、江戸上野で彰義隊と戦った「上野戦争」などを経て、その戦いは明治二年五月十八日に箱館戦争で終焉を迎えるまで続くことになった。しかし、政府軍はいずれにも勝利し、東国平定の基礎ができた。

戦乱の最中で新政府の体裁も整っていなかったが、三月十三日、早くも神仏判然令が發布された。これには英彦山出身である匡一の調査が大きく寄与していたが、神仏

匡一「ほ、はー。かしこまりました。」

遂に十月二十七日、徳川將軍慶喜によって政権が朝廷に返上された大政奉還。ようやく成し遂げられた偉業ではあつたけれど、これを画策した維新の立役者、龍馬と中岡慎太郎両名は十一月十五日、京都の近江屋で暗殺されてしまう。

十二月九日、王政復古の大号令が宣言され、ようやく明治政府が樹立した。その時、実美ほか尊王派公卿達や長州藩の復位が認められることとなり、実美は太宰府から上京して政治の表舞台に復帰して、成立した新政府で議定となった。

この頃、三河で神宮の御札が降ったことから再び「えじやないか」が始まっている。

明治維新

習合を禁止する神仏分離令であるが、神都伊勢の町でも寺や町名など大きく変革された。同時期、神仏混合だった英彦山の靈仙寺も実美の助力や匡一らの努力によって、「靈仙寺」を廃し、高千穂家を興して「英彦山神社」に、さらに後年、現在の「英彦山神宮」と改変されている。

これに次いで、三月十四日に明治政府の基本方針である「五箇条の御誓文」が發布され、六月十一日、現在の内閣に当たる太政官制が制定された。行政について、国の権力を太政官に集中させ、立法・行政・司法の三権分立を図った。三条と岩倉は議定兼行政官輔相に就任して、七月十七日、江戸を東京と称することとなり、八月二十七日、天皇が即位して、九月八日に元号を明治に改元。ここに明治新政府が樹立、明治維新された。政府では、総裁、議定、参与の三職による最初の会議が行われた。有栖川熾仁親王が総裁、実美は岩倉具視と共に

副総裁となつて実質のナンバーワンとなつた。

この時、匡一は実美の「徴士ちゆうし」に任命されて、その活動は公に認められることとなつた。「徴士」とは明治初年に明治政府の太政官に登用された官吏をいうが、今で言う、首相秘書官あるいは補佐官と言つたところであり、極秘裏にも情報収集と水面下での活動なども行つた。そうして、十月十三日、明治天皇は江戸に行幸したが、この行幸の背景には匡一のお膳立ての働きが大いに寄与した。

極論すれば、このように明治維新は、「匡一（ら）、名もなき尊王の志士たち」の努力によつて収集された情報によつて成し遂げられたとも言える。

この年に早くも伊勢では山田奉行と宇治と山田三公会合の自治組織が廃止され、奉行所に度会府が設置され、最初の府知事は戊辰戦争でも戦つた攘夷派の公卿だつた橋本実梁（まなむね）が任命されている。

との繋がりが強くなつたが、伊勢での定宿は「備前屋」だつた。

何度も通つた定宿「備前屋」では、伊勢の尊王派との交わりも出来てきて、その後には神宮制度の改革を果たすことになる内宮権禰宜だつた浦田長民なども交流を深め、伊勢神宮の将来を語り合い、夜を明かしたこともあつた。こうした人間関係がその後の伊勢を創る事業の基礎となつている。また、匡一の実直な振る舞いが、跡取りのなかつた備前屋の女将「まつ」に見初められたものもこの頃であつた。

六月十七日、版籍奉還が発令された。全国の藩が所有していた土地（版）と人民（籍）を朝廷に返還するといふ明治政府が行つた政治改革である。七月十七日には、藩を廃し県とする（廃藩置県）が実施されたが、「府」は東京、京都、大阪に限ることとなり、度会府は度会県に改称した。

伊勢に定住

明治二年（一八六九年）、実美は右大臣となつたが左大臣は空席であつたため、事実上のトップ続投となり、さらにリーダーシップを発揮する。匡一（ら）の働きにより、三月十二日、天皇が一度目の東京行幸を行い、京都に戻らないことで事実上、江戸に遷都した。天皇の行幸は江戸幕府に替わつて新しくなつた為政者である天皇を国民に広くアピールするデモンストレーションでもあつた。この時、伊勢神宮は第五十五回式年遷宮を迎えているが、この行幸の途中、明治天皇が天皇として初めて伊勢神宮を参拝したが、これもまた祭政一致の発場の一つであつた。そのお膳立てのため、匡一（ら）は、何度も伊勢に足を運び、山田奉行所や鳥羽藩に出入りして行幸行程途中の情勢をついて情報収集し、実美に報告することで天皇行幸が安全にかつ滞りなく遂行された。その結果、匡一（ら）と伊勢

明治三年（一八七〇年）を迎えた一月三日、天皇に神格を与え、神道を国教と定めて、日本を「祭政一致の国家」とする国家方針、つまり「大教」を宣布（大教宣布）することになるが、この国家方針は実美によつて考案され、後に、それを具現化しようとしたものが、匡一（ら）、のちの太田小三郎が提唱した「神苑会」だつた。大教宣布により、全国的に廃仏毀釈運動が激化している。

そのような状況の中、伊勢では三月、河崎が大火になり百二十戸が焼失。五月には、的矢湾にイギリス船が測量のためとして入港し両宮の参拝を願ひ出ている。六月、県庁を度会郡山田岩淵町箕曲に設置し、橋本実梁が引き続き権令（県令）を務めた。八・九月、暴風雨で苦しみ、平民に苗字が許されたりして、明治初年は伊勢でも目まぐるしく変化する。

天皇は海路よる大阪行幸を、そして、その途中に二度目の伊勢神宮参拝を計画していたが、海上は外国船が頻

繁に出没して緊迫した状況にあったため、安全な行幸を達成するためには十分な調査が必要となり、そのため、この年、匡一は伊勢に居を構え、常駐した。

次への始動

明治四年（一八七一年）五月十四日、浦田長民などによつて神宮制度が大きく改革された。その内容は、神職の世襲や御師の大麻配布が禁止されたことなどであるが、御師で成り立っていた伊勢の町は激動の時代を迎える。

七月、政府は正院・左院・右院の三院と外務省以下八省からなる太政官を設置。太政官制度における長官として太政大臣（今で言う内閣総理大臣）が置かれたが、実美は、明治最初の宰相である太政大臣となったが、新政府内では薩長の軋轢が大きく、その調整役として機能

している。

その後、明治十八年（一八八五年）に太政官制が廃止され内閣制度が発足するまでの十四年間の長きに亘り、明治政府を牽引し続け、また翻つて、幕末から明治維新までの間も明治政府樹立に奔走し続けたことは特筆に値するだろう。明治維新の立役者といえば、坂本龍馬、高杉晋作、伊藤博文、西郷隆盛などが語られるが、実美こそ、「近代日本を創った三条実美」と言われるに相応しいように考えるが、その活躍があまり知られてはいないのは残念に思う。

七月十四日、それまでの藩を廃止して地方統治を中央管下の府と県に二元化した廃藩置県が発布され、十一月二十二日、鳥羽県を廃し、久居県を経た久居藩領一志郡を含め、改めて度会県が発足し、県庁を度会郡山田岩淵町箕曲に設置されている。

十一月二十二日、岩倉具視らが欧米に派遣（遣外使

節団）され、大いなる刺激を受けて帰国したが、その後の改革の礎が作られたことは大いに知られたことである。

伊勢では、山田羽書度会府札が廃止され、また、郵便制度や新貨条例などの新しい制度が矢継ぎ早やに施行されている。

海路などの安全を確認したであろう匡一の働きによつて、明治五年（一八七二年）、明治天皇は大阪巡幸の際に、軍艦にて来勢して鳥羽で一泊し二軒茶屋から上陸、五月二十六日、伊勢神宮両宮に二度目の参拝を果たして、二十八日に、滞りなく大阪に向かって出帆した。同行した者の中に西郷隆盛もいた。



のち二軒茶屋の店先に記念碑（上写真）が建立されている。この時、帰り掛けの行在所には大世古にあった御師龍大夫邸（現、大豊和紙工業㈱）が当てられている（下写真）。

同年、鳥羽城が取壊しになり、郵便取扱所が一志久保町に開設しているが、古市妓楼が三十二軒に減少した頃で、古市の繁栄に陰りが見え始めている。

この頃には実美は、明治政府が祭政一致により国民を統合する理想（大教）を実現するため、伊勢神宮を日本の総鎮守として、また、その門前町 宇治山田をそれに相応しい「神都」として整備する、即ち、「神苑」設立や交通網整備についての具体的な施策を匡一と共に始動した。神苑の整備は実美の父、三条大納言実萬さねむ卿からの悲願でもあった。合わせて、この年の九月十二日には新橋横浜間鉄道の運行も開始され、交通手段も大きく変わった瞬間であった。

備前屋 太田小三郎

明治天皇の二度の伊勢神宮参拝など、二連の大役を滞りなく果たし、一段落がついたこの年(明治五年)、匡一は、以前から定宿「備前屋」の女将まつに見初められていたけれど、その申し入れを受け入れ、備前屋 太田小三郎を襲名することとなった。しかし、これには女将に跡取りを懇願されていただけではない、次の「計画」が秘められていた。その後の小三郎の活躍は前述通りであったことは良く知られているところであるけれど、小三郎が「伊勢を創る」にあたって、美美との結びつきはその後、さらに強く、深くなっていく。

謝辞

らんし、全国から大勢の参詣客を受け入れなければならん。そのためには鉄道も敷かなきゃならんし、町だつて発展してもらわなければならん。そのためには電気や銀行も必要だろう。ヤルことはたくさんあるぞ。まずは共に働いてくれる伊勢の仲間たちと勉強会(学習討論の結社 交修社の設立)だ！」  
と決意を新たにするのであった。

伊勢を創った太田小三郎 青春編 (完)

匡一「お上の行幸もようやくと済ませることができ

た。これからは三条様のお考えに従つて、日本の総鎮守に相応しく伊勢神宮を整備しなければな

伊勢市教育委員会事務局 文化振興課ならびに小三郎研究家 飯田ヨシ子氏にご指導いただきました。深く御礼申し上げます。

## 参考文献

伊勢を創った太田小三郎 二〇十九年 秋田耕司  
三条実美 維新政権の「有徳の為政者」

平成三十一年 内藤 一成

幕末秘史 英彦山殉難録 昭和四十年 高千穂有英  
維新史稿 日子山義僧伝 明治三十年 江島茂逸 編  
宇治山田明治年代記 昭和五十七年

三重県郷土資料刊行会 倉田正邦 校訂

伊勢市のあゆみ 昭和三十三年 伊勢市教育委員会  
校訂 伊勢度会人物誌 昭和五十年 川端義夫 校訂  
神都名家集 明治三十四年 三谷敏一  
勢伊志紀顔見評判記 諸名士大一座

明治二十八年 川口瀧造

宇治山田市史 復刻版 昭和四十七年 三宅書店  
伊勢市史近代編 平成二十四年 伊勢市

神苑会史料 明治四十四年 神苑会清算人事務局  
郷土史草四十三〜六号 神都計画とその背景 阿形次基  
神苑会と宇治山田近代的聖地の形成をめぐって  
伊勢神宮の近現代史 「神都物語」

平成二十七年 ジョン・ブリン

滋賀大学経済学部研究年報Vol. 一〇 「大正バブル期における起業活動とリスク管理」平成一五年 小川 功  
ふるさとの想い 写真集明治大正昭和伊勢二見小俣

昭和六十一年 国書刊行会

図説 伊勢・志摩歴史下巻 平成四年 郷土出版社  
目で見える伊勢・志摩の一〇〇年平成二年 郷土出版社  
神都線(廃線記念アルバム)昭和三十六年 三重交通編集  
神都線の電車 平成二十一年 勢田川出版

オンライン百科事典ウィキペディア

インターネット百科事典コトバンク ほか

小三郎誕生と背景	1
三条実美	2
匡一の幼年期	3
実美と匡一の出会い	2
五卿落ち	1
英彦山義僧殉難	1
実美の復権	1
明治維新	1. 5
伊勢に定住	1. 5
次への始動	2
備前屋太田小三郎	1